

クザーヌス『知恵の狩猟について』における 「生成可能」の概念

岩 田 圭 一

はじめに

クザーヌスの晩年の作『知恵の狩猟について』(*De venatione sapientiae*) (1463年)¹⁾は、クザーヌスが自らの哲学的思索の歩みを回顧した自伝的著作として知られるが、これと前後して書かれた『可能現実存在について』(*De possest*) (1460年)、『テオリアの最高段階について』(*De apice theoriae*) (1464年)と並んで「可能(*posse*)の形而上学」を展開した著作としても知られる²⁾。『可能現実存在について』においては「可能現実存在(*possest*)」が、『知恵の狩猟について』においては「生成可能(*posse fieri*)」に対する「作成可能(*posse facere*)」(n.115,4,6-8,13,15, n.116,5,8-11,13, n.117,1)が、『テオリアの最高段階について』においては「可能それ自体(*posse ipsum*)」が神名として提示されるが³⁾、クザーヌスの思索が「把握されえないもの」としての神を把握しようとする試みであったことを考えれば⁴⁾、これらの神名がその試みにおけるそのつどの成果であって、神の完全な把握を成立させる名称であるわけではないということに気づくのに時間はかからないだろう。しかしそれでもクザーヌスがそれらの名称を把握されえない神にあえて付与したのは、それぞれの名称にそれなりの意義があったからであろう。本稿では「生成可能の限界(*terminus ipsius posse fieri*)」(n.14,19-20, n.80,13-14)として見出される「作成可能」を神名とする『知恵の狩猟について』を取り上げ、この神名の意義を明らかにすることを目指す。そのためには「作成可能」がその「限界」であるとされる「生成可能」についての理解が不可欠であるが、「生成可能」は文脈によってさまざまな意味に用いられ、きわめて捉えがたい概念である⁵⁾。そこでこの概念が用いられるいくつかの文脈を辿ることから始めることにしたい。

I 中間者としての生成可能

クザヌスは『知恵の狩猟について』第2章において、この美しき世界の制作者である神を探求するにあたって (n.6,6-8), 「生成することが不可能なものは生成しない (impossibile fieri non fit)」⁶⁾ という「哲学者たちの主張」(n.6,13-14) に目を向ける。「制作者」, 「生成」といった表現からも明らかのように、クザヌスがこの探求において念頭に置いているのは世界および万物を作った創造主にはかならない。「生成可能」の概念が導入されたのは、クザヌスがそのような主張に目を向けたからだと考えられる。そこでまずこの概念が導入される第3章を見ることにしたい。

クザヌスはその哲学者たちの主張から、「生成したり創造されたりすることが不可能であったし、不可能である」(n.7,5) もが存在するというを前提として立て、そのようなものを「生成可能に先立つ (praecedit ... posse fieri)」もの、「永遠なるもの (aeternum)」とみなす (n.7,5-6)。ここで初めて「生成可能」の概念が用いられるのだが、この概念のここでの用法はそれほど特殊なものではない。というのもここでの「生成可能」は、「生成可能である」という性能を意味すると考えられるからである。生成したことも生成することもないようなものは確かにそのような性能とは無縁だろう。生成可能という性能をもつものとは、生成するものである限りの万物にはかならない。しかしこの性能は、すでに生成してしまっているものにはないのではないだろうか。生成したものについてこの性能を考えるには、当のものが生成する前の段階に目を向けざるをえない。実際クザヌスは次のように述べている。「生成したも、あるいは生成するであろうものはすべて、生成可能なしには生成しなかったし、生成しないであろう」(n.7,7-8) と。生成したものは生成可能なしには生成しなかったと述べられているが、これは当のものが生成する前の段階に目を向けた上での発言と言える。ところで万物を包含する永遠なるもの (n.8,10-11, cf. n.59,19-23, n.71,17-20) においては、万物はまだ生成しておらず、それゆえ生成可能なものとして存在していると考えられる (cf. n.25,6-7)。そうすると生成したものが生成する前の段階とは、万物が永遠なるものうちに包含されている段階のことだと言えるだろう。このように永遠なるものが存在するという前提があり、かつ永遠なるものうちに万物が包含されているという段階を考えるとき、万物は生成可能という性能をもっていると言うことができるのである。

続いてクザーヌスはこのような包含の展開へと目を転じる。ここにおいて「生成可能」の概念は永遠なるものにおける万物の性能ということでは汲み尽くしえない意味合いをもって来る。この包含の展開とは永遠なるものにおける万物の性能が発揮ないし実現されることにはかならないが、この実現には起動因の役を果たすものが必要とされる。クザーヌスはそれを次のように述べている。「生成可能の後に存在する万物 (omnia) は創造主によってその生成可能から生み出された」(n.8,2-4),あるいは「神は生成可能から万物を作る」(n.25,2)と。この二つの言明は、実現されるべき生成可能と、実現された万物と、この実現をもたらす創造主とを明示する、万物の生成ないし展開に関する一種の定式とみなされうる。そしてさらにこの定式に基づいて生成可能のあり方が問題にされることになる。クザーヌスによれば、生成可能は一方で生成したものすべてに先立っているのだから生成したものではないが (n.7,15-17), 他方で永遠なるものよりも後に存在するものであるから創造主という始源をもつ被造物である (n.7,17-19, n.8,1)。被造物とはいってもそれは、生成したものではないがゆえに消滅するものではない (n.7,19-20)。そしてクザーヌスはこのような生成可能について、「始源をもつものとして永久に (in aevum) とどまり、永続的なもの (perpetuum) としてある」(n.7,20-21) という説明を加えている。これに対して万物は、永続的なものを模倣 (imitari) するが、永続的なものに到達することは決してなく、「時間的なもの (temporalia)」とか「感覚的なもの (sensibilia)」と呼ばれる (n.8, 6-8)。こうして時間的なものに先立って永続的なものがあり、永続的なものに先立って永遠なるものがあるということ、言い換えれば、永遠、永続、時間という三つの領域が区別されるということが明らかになる (cf. n.6,15, n.30,3-6)。そして生成可能はこの三つの領域の中間に位置する永続の領域に属し、創造主と万物とを媒介する中間者であることが理解されるのである⁷⁾。

このように中間者としての生成可能は、永遠なるもののうちに包含されている万物の展開という観点において見出されるのだが、その展開は第3章では図式的に、すなわち万物は創造主によって生成可能から生み出されるという仕方では説明されたにすぎない。この図式的な説明は、生成可能と万物とを永続的なものと時間的なものとして区別するのに役立つが、生成可能から万物への展開⁸⁾がいかなる仕方で行われるかを明らかにするものではない。しかしこの展開の仕方の中にこそ「生成可能」概念の独特な意味合いが隠されていると考えられる。これについては続く第4—5章

において比喩を用いた説明が行われているので、次にそれを見ることにしたい。

II 生成可能の展開

クザーヌスはまず第4章において論理学の喩えを用いて生成可能の展開を説明する。そこで取り上げられるのは教師の知性 (*intellectus magistri*) (n.9,3) による論理学の創造である⁹⁾。教師の知性はこの創造に際して、論理学の生成可能を確立、形成する (n.9,5)。感覚的な言葉で表現される個々の推論式 (cf. n.9,23) は論理学の生成可能から生成するのであるが、この生成がどのようにして起こるのかがここで明らかにされる。われわれが個々の推論式を作ることができるのは、すでに推論の諸々の論式 (*modi*) が存在しているからであるが、これらの論式は教師の知性によって論理学の生成可能のうちに包含的に (*complicite*) 創造されたものであるとされる (cf. n.10, 5-6)。しかし教師の知性はそれらの論式を何の道具もなしに創造したのではない。まず名詞と動詞を用意し、これらから命題を作った上で、三つの命題を大前提、小前提、結論という順に並べる (n.9,5-8)。その際二つの前提命題における中項の位置によって三つの格が得られる (n.9,11-14)。さらに命題には全称肯定命題 (A)、全称否定命題 (E)、特称肯定命題 (I)、特称否定命題 (O) という四つの種類があるため、それぞれの格における大前提、小前提、結論はそれぞれ、この四種のどれかでなければならない。一つの格における組み合わせは64通りあるが、有用な組み合わせは限られる。例えば第1格においては、「大前提—小前提—結論」が「A—A—A」という組み合わせであれば、これは有用な組み合わせで Barbara と呼ばれ、また「E—A—E」であれば、Celarent と呼ばれる¹⁰⁾(cf. n.9,14-21)。クザーヌスはこのようにして得られた論式を「三段論法の種的型式 (*specificae formae syllogisticae*)」(n.9, 21-22) と呼び、これらの型式が「理性 (*ratio*) のうちに基礎づけられ、存続する」(n.9,22) と述べている。個々の推論式はそうした型式を模倣して生成するのであり、これが論理学の生成可能の展開であるとされる (n.9,22-24)。この論理学の喩えの意義は、生成してくるものによって模倣される型式が論理学の生成可能のうちに包含されていると言われていることにある。

この喩えはすぐに、神による世界の創造を説明するのに役立てられる。クザーヌスは論理学の場合と同様に次のように述べている。「世界の教師である栄光に満ちた神は、美しき世界を作ろうとして、この〔美しき〕世界の生成可能を創造し、その世界

を作るために必要なものすべてをその生成可能のうちに包含的に創造した」(n.10,3-6) と。そして世界の美しさが必要とするものとして、「存在するもの、生きているもの、知解するもの (*illa quae essent ... quae ... viverent ... quae ... intelligerent*)」¹¹⁾ という三つものを挙げている (n.10,6-7)。これらは論理学の場合における大前提、小前提、結論に相当するものと考えられる。そうであるなら、これら三つの命題が A, E, I, O という四つの種類のゆえにさまざまな組み合わせをもっていたように、存在するもの、生きているもの、知解するものという三つものもさまざまな組み合わせをもっていることになる¹²⁾。ここでは有用な組み合わせの例は挙げられないが、論理学の場合に有用な組み合わせが「三段論法の種的型式」と呼ばれる論式であったように、ここでの有用な組み合わせは「美の諸々の形象ないし様式 (*species seu modi pulchritudinis*)」(n.10,8-9) と呼ばれる。これらの形象ないし様式はまた、「神の精神の、前もって規定された諸々の活動的な根拠 (*divinae mentis practicae praedeterminatae rationes*)」(n.10,9-10) とか、「神の知性 (*divinus intellectus*) の、前もって規定された諸々の根拠」(n.10,14) と言われる。そして世界の生成可能のうちにはこのような諸根拠があり、これに従って世界の生成可能は展開されるのだとされる (n.10,13-14)。

ところで個々の推論式が三段論法の種的型式を模倣しているのと同様に、感覚的に捉えられる世界なるものがそうした諸根拠を模倣していると言えるのだろうか。しかし世界はクザーヌスにおいては万物の総体としての普遍¹³⁾であるから、実際に世界の生成可能から展開してくるのは万物であって、世界という総体ではない¹⁴⁾。クザーヌスは世界の生成可能の一展開として「人間の生成可能」の展開を挙げる。人間の生成可能は「人間の前もって規定された根拠 (*ratio hominis praedeterminata*)」に従って展開されると言われるが (n.10,14-15)、この人間の根拠は、先ほど言われた、神の知性をもつ諸々の根拠の一つであると考えられる。世界の生成可能は、この場合には人間の生成可能として、世界の生成可能のうちにある諸々の根拠の一つである人間という根拠に従って展開される。この場合に生成してくるのは個々の人間であるから、個々の人間に先立ってあるのは当然、人間の生成可能であることになる。こうして「生成可能」は「Xの生成可能」という形で用いられ、万物の生成が総体的に(世界の生成として)語られる場合は「X」に「世界」が、個々のものの生成が語られる場合は「X」に当のものの名称(例えば「人間」)が代入されるということが明らかと

なる。そしてここに「生成可能」概念の独特な意味合いを垣間見ることができる。もし何の生成可能であるかが未決定なままで永続的な生成可能があるのだとしたら、生成可能と万物との間には埋めたい溝があることになっていたことだろう。しかし実際には、「Xの生成可能」というように、その生成の目標となるものの名が現れていなければならない、それゆえ「Xの」という限定によってその生成可能とXとの間に一つの道ができているとすることができる。言い換えれば、生成可能は目標の定まったものとしての限りで（Xの生成可能としての限りで）存在しているのである。生成可能は永続的なものとされるが、それは時間的なものから完全に切り離された状態で固定されて存在しているのではなく、或る特定の時間的なものを目指して存在しているのだと言えるだろう。ともかく「生成可能」のこのような特徴のゆえに、万物の展開という動的な説明も意味をなすのだとすることができるだろう。

続く第5章では第4章における説明を踏まえて、生成可能と生成したのものとの関係についてさらに説明が加えられる。そこでは幾何学者が円を描く例が挙げられる。それによると幾何学者は、「円の前もって規定された根拠を顧慮（*respicere*）して、感覚的な対象の生成可能（*posse fieri sensibilis subiecti*）が許す限り、その根拠に従って（円を描くことを）遂行しようと努める」のだとされる（n.11,4-5）。ここでは先の「人間の生成可能」に相当するものとして「感覚的な円の生成可能」（n.11,10）、あるいは「感覚的な質料において円に成る可能（*posse fieri circulum in sensibili materia*）」という言い回しが用いられる。「感覚的な」という限定が付加されているのは、「円」が描かれた円だけでなく、数学的对象としての円をも表すと考えられるからである¹⁵⁾。「感覚的な」という限定を付加すれば、ここで生成してくるのが個々の描かれた円であることが明確になる。それはともかく、ここでもやはり感覚的な円の生成可能が或る根拠に従って展開されるということが明らかにされる。クザヌスはそれを「確固として不変である知性的根拠（*intelligibilis ratio*）」と呼ぶ。円の根拠は「円の中心から円周までの距離が等しいこと」（n.11,6-7）である。ここまでは人間の生成可能が人間の根拠に従って展開されるという先の説明と変わりはない。第5章ではさらに、感覚的な円がその根拠とまったく等しいものとして生成することはないということが明らかにされる（n.11,8-10）。感覚的な円の生成可能は円の知性的根拠の後に存在し、これを模倣するものであるがゆえに、感覚的な円とその根拠とは隔たったものなのである（n.11,10-12）。こうしてXの生成可能からXが展開される場合、X

はXの根拠を複製したのではなく、その根拠を模倣したものにすぎないということが明らかになるのである。この場合、模倣されるものと模倣するものとは等しいものとはみなされないのである。これは円のようなものに限ったことではなく、人間の場合にもあてはまる。クザーヌスは同じ章で、生成した人間に男女の別があるのは、男性と女性とで別々の根拠があるからではなく、それらが人間という一つの根拠に従って生成する際にその根拠から右あるいは左に逸れてしまったからであると述べている (n.12,9-13)。もちろんこれは話をわかりやすくするために男女の例が挙げられているのであって、現実にはもっと多様な逸れ方があるに違いない。ともかくこの章でクザーヌスが言わんとしているのは、Xの生成可能からXが生成する場合にXはXの根拠を模倣し、Xの根拠の不完全な現れとして生成するということであろう。あるいはまた、Xの生成可能という可能態がその現実態へと移行する過程はXがXの根拠から遠ざかっていく過程であるということもできるだろう。

このように「生成可能」はその用法からして、万物の展開を動的に説明するのにきわめて好都合な概念であると言える¹⁰⁾。またその展開の具体的な説明において、生成するものはその根拠を模倣するというプラトン主義的な思考様式が見られたが、それが生成可能の展開において起こるとされている点にクザーヌスの独自性を読み取ることができるだろう。しかしクザーヌスの関心はやはり万物の展開を引き起こすもの、すなわち創造主を把握しようとすることにある。次にその点について見ることにしたい。

III 生成可能の限界

クザーヌスは第7章において、生成可能に先立つ永遠なるものについて次のように述べている。「万物の一なる原因のみが万物の生成可能の創造者 (creatrix) であり、それはすべての生成可能に先立って、その限界としてある」(n.16,4-5) と。また第38章においても、これまでに述べてきたことをこれ以上短くは言い表せないと断った上で、「万物に成る可能〔万物の生成可能〕の限界は、万物を作る可能〔万物の作成可能〕である」と述べている (n.113,1-3)。ここで初めて、生成可能の限界である創造主に「作成可能」という名称が与えられる。生成可能の限界である創造主は、「万物を作ることの可能な全能なるもの (omnipotens omnia potens facere) であるがゆえに、生成可能それ自体 (ipsum posse fieri) をも作ることが可能である」(n.

114,1-2) とされる。しかし生成可能それ自体を作るというのは、いかなることなのだろうか。クザーヌスはすぐ後で、「その始まり (initium) と終わり (finis) が全能なるものであるところの端的な生成可能 (posse fieri simpliciter)」と「生成するものへと縮限された生成可能 (posse fieri contractum ad id quod fit)」とを区別している (n.114,5-6)。「生成するものへと縮限された」というのは、例えば世界や人間へと縮限されたという意味に解することができる。これに対して「端的な生成可能」とは、文字通り何の限定もされていない生成可能を指すものと解することができる¹⁷⁾。すでに述べたように生成可能は創造主によって作られたものであるが、このように端的な生成可能と限定付きの生成可能とが区別されることから、次のような疑問が生じる。創造主が生成可能それ自体を作ると言われる場合、まず端的な生成可能が創造され、続いて世界などの限定が行われて世界の生成可能などが生じるということなのだろうか。この問いに対しては、否と答えなければならない。というのも「生成可能は漠然として限定されていないものとして創造されたのではなく、ほかならぬこの世界が生成するようにと、終わりと限界に向けて創造されたもの」(n.82,4-6) だからである。ただしこの限定は「神自身の観念のうちで (intra suum conceptum)」(n.81,16) 行われるのであり、神は世界の生成可能を創造するにあたって、「永遠性において前もって考えられた (in aeternitate praeconceptum) 生成可能を、世界とその諸部分へと限定した」(n.82,3-4) のだと述べられている。したがって端的な生成可能とは、「永遠性において前もって考えられた生成可能」、言い換えれば、神が自らの精神のうちにもっている生成可能にはかならず、これを世界へと限定することで世界の生成可能が創造されるのだと言えるだろう。作成可能としての創造主が生成可能それ自体をも作ったと言われるのは、このような意味においてであると考えられる。

ところで生成可能の限界が作成可能であるということによって神が完全に把握されたことになるかという点、そうではない。生成可能の限界を「作成可能」と名づけることは、把握されえない神をその名称で限界づけることを意味する。しかし把握されえないものは限界づけられないがゆえに把握されえない。実際クザーヌスは生成可能の限界を「まったく限界のないもの」とみなしている (n.80,13-14)。このいわば「限界のない限界 (interminus terminus)」(n.80,9-10) は当然、名づけという限界づけをも拒否する。このことは第7章の冒頭において次のように示されている。

狩猟〔の獲物〕についての私の諸々の憶測が休らうところ、それはすなわち、万

物の一なる原因のみが万物の生成可能の創造者であり、それはすべての生成可能に先立って、その限界としてある、ということである。その原因は、名づけられるものでも、分有されうるものでもなく、むしろその〔原因の〕類似 (similitudo) が万物において分有されているのである。(n.16,3-7)

名づけられることも分有されることもないものは把握されえない。しかし万物は、そのようなものの類似を分有しているがゆえに、それを生成可能の限界として見出そうとするのである。生成可能が万物へと限定されているものであり、万物が生成可能における諸々の根拠を模倣するものであることはすでに見たが、さらに第6章において生成可能は「神の、分有されうる類似 (participabilis dei similitudo)」(n.15,16) とみなされることになる。クザーヌスは生成可能の先に、生成可能を通して、神を把握しようとしているのだと言えるだろう。また分有されえない一なる原因としての神は「万物のいづれでもないもの (nihil omnium)」(n.16,17, n.64,5, n.103,5, n.122,6) とも言われる¹⁸⁾。神が万物のいづれでもないものであるということは、それが「万物に先立って」おり、「言い表しえない仕方で」見られる (n.64,6-7) ものであることを示している。そうすると「作成可能」という名称もまた神にとってはふさわしくないことになるだろう。

しかしそれでもクザーヌスは『知恵の狩猟について』において「作成可能」という神名を捨てない。この著作の最終章である第39章において取り上げられる一種の定式、すなわち「生成した可能 (posse factum) [万物] は、作成可能によって生成可能から作られた」(n.115,7) という定式からも明らかのように、最後までその名称を創造主に用いるのである。この名称が最後まで用いられるのはこの名称に何らかの意義があるからにはかならない。クザーヌスはその定式に触れる前に、「可能は三重である」、すなわち「作成可能、生成可能、生成した可能である」(n.115,4-5) と述べているが、創造主による万物の創造を説明するときに「創造主—生成可能—万物」ではなく「作成可能—生成可能—生成した可能」という三項関係で説明したほうが、三項の連続性を容易に見て取ることができるといふ利点がある。連続性があるとはいっても「作成可能」は、「絶対的な」(n.116,13) という限定が付加されることから明らかのように、被造物である生成可能および生成した可能から「無限に遠く離れたところ」(n.112,2) にあるものとされる。それでもこの三項は類似の関係にある。そしてこの関係を示すのが「可能」という共通の語であると解することは不適切なことでは

ないだろう。クザーヌスが最終章に至るまで創造主を作成可能と呼び続けたのは、この類似の関係を強調するためであったと考えられる。また第6章において「生成可能」が「神の、分有されうる類似」と規定されたことも、この著作における類似の關係の重要性を物語っている¹⁹⁾。クザーヌスはこうした関心をもっていたがゆえに、「作成可能」という名称によって神が完全に把握されるわけではないことを熟知しているながら、あえてその名称を用い続けたのだとすることができるだろう。

おわりに

以上、永遠なる創造主のうちに包含されている万物の性能としての生成可能、そしてその展開において創造主と生成したものとを媒介する中間者としての永続的な生成可能、さらに万物の展開についての動的な説明を成り立たせるXの生成可能を区別し、その上で創造主としての神が生成可能の限界に作成可能としてあるとされることの意義について考察した。「作成可能—生成可能—生成した可能」という三項関係は、その各項が「可能」という一点で結びつき、類似の関係を形成していることを示していた。また万物が神の類似を分有すると言われる際には、神と万物の中間に位置する生成可能がほかならぬ「神の、分有されうる類似」と呼ばれた。万物はこの類似を分有する限りにおいて、無限に隔たった神のほうへとまなざしを向けることができるのだと言える。しかし何よりも注意すべきことは、この著作において採用された神名すなわち「作成可能」もやはり「人間の語」(n.100,8-9)である限り、神の完全な把握を成り立たせる名称ではありえないということであろう。このような神の探求には「語ることに耳を傾けることよりもむしろ沈黙することと見ること」(n.100,7-8)がふさわしいに違いない。しかし人間であるクザーヌスは、「〔人間の語で語るのとは〕別の仕方では捉えたことを表現できない」(n.100,10)がゆえに、あえて人間の語で語り続けたのだとすることができるだろう。

註

- 1) テキストは Klibansky と Senger による版 (Nicolai de Cusa opera omnia, iussu et auctoritate Academiae Litterarum Heidelbergensis, volumen XII, *De venatione sapientiae, De apice theoriae*, ediderunt commentariisque illustraverunt Raymundus Klibansky et Iohannes Gerhardus Senger, Hamburgi 1982) を用いる。なお本稿において例えば 'n.8,3-5' のように節番号と行数のみを挙げる場合、この版における該当箇所

- を指すものとする。またテキストの訳出に際しては、基本的には邦訳（拙訳（共訳）『知恵の狩猟について』、キリスト教神秘主義著作集第 10 巻所収、教文館、東京 2000、133-252、267-300）を用いるが、表記等一部異なる場合もある。
- 2) A. Brüntrup (*Können und Sein: Der Zusammenhang der Spätschriften des Nikolaus von Kues*, München 1973, 12-13, 63) によれば、クザーヌスの可能の思索 (posse-Denken) には 'possest', 'posse fieri', 'posse ipsum' によって特徴づけられる三つの段階がある。これらはそれぞれ『可能現実存在について』、『知恵の狩猟について』、『テオリアの最高段階について』の主題をなしている。
 - 3) Cf. *De possest*, nn.7, 14, 16, 24-30, *De apice theoriae*, n.17,2-3.
 - 4) クザーヌスの代表作『知ある無知について』(*De docta ignorantia*) はその最たるものであろう。
 - 5) 「生成可能」概念の捉えがたさはしばしば指摘される。Cf. Brüntrup (1973, 75), J. Hopkins (*Nicholas of Cusa's Metaphysic of Contraction*, Minneapolis 1983, 7-9).
 - 6) 「生成することが不可能なもの」とは、生成する（作られる）力能ないし性能をもたないものことである。すぐ後で明らかにされることだが、生成することが不可能なもの、すなわち作られる力能ないし性能をもたないものとは、創造主としての神にはかならない。またここに言われる「哲学者たちの主張」がトートロジー以上の意味をもつのは、生成するものはすべてその生成の「可能」を前提とするという考えがあるからである。Cf. Brüntrup (1973, 73-74).
 - 7) この点は Brüntrup (1973, 69-71) の強調するところである。また Hopkins (1983, 8) も、生成可能が創造主と縮限されたもの（すべての被造物）との間ではなく、創造主と生成したもの（万物）の間にあるものだということを注意している。
 - 8) クザーヌスは「万物の展開」(cf. n.8, 14-15, n.23, 10-12, n.80, 7-8) とも「(万物の) 生成可能の展開」(cf. n.9, 24, n.10, 13-15, n.67, 13-14) とも言う。具体的に言えば、前者は創造主が万物を生成可能から展開すること、後者は創造主が万物の生成可能を展開することを意味し、両者とも同じことを語っていると考えられる。
 - 9) ここで問題にされているのは、論理学の知識をもっている者がその知識によって推論を行うということではなく、まさにその知識を確立した教師がその知性によってどのように論理学を創造したかということである。
 - 10) 以上の説明についてはアリストテレス『分析論前書』(I 4-6) を参照。
 - 11) これについては E. R. Dodds (*Proclus, The Elements of Theology: A Revised Text with Translation, Introduction and Commentary*, Oxford 1963, 90-93, prop.101-103) を参照。またディオニシオス・アレオバギテス『神名論』第 5 章第 5 節（熊田陽一郎訳、キリスト教神秘主義著作集第 1 巻所収、教文館、東京 1992、211-212）と第 2 章の註(22) (310-312) も参照。
 - 12) クザーヌスは第 31 章において、「知性的な本性 (intellectualis natura)」, 「生命的

な (vitalis) 本性」, 「現存する (exsistens) 本性」という三つの本性の関係を説明する際に次のように述べている。「第一の本性〔知性的な本性〕にとって、現存することと生きていることは知解することである。第二の本性〔生命的な本性〕にとって、現存することと知解することは生きていることである。第三の本性〔現存する本性〕にとって、知解することと生きていることは存在することである」(n.93,14-16) と。これを典拠にして、存在するもの、生きているもの、知解するものの組み合わせについて語ることが可能だろう。

- 13) Cf. *De docta ignorantia*, II 4.
- 14) 「万物」は通常、個々の生成したものを指すが、個々のものの総体を指すこともある。後者の用法は *De docta ignorantia*, II 5, n.117 に見られる(岩崎允胤・大出哲訳『知ある無知』, 創文社, 東京 1966, 253-254, 第 2 巻第 5 章訳者注(4)を参照)。
- 15) 「感覚的な円の生成可能」が「感覚的な質料において円に成る可能」と言い換えられているが、「感覚的な質料」という部分がここでの「感覚的」の用法を示唆している。というのも「感覚的な質料」は、アリストテレスに見られるように、「思惟的な質料 (ὕλη νοητή)」(数学的対象の質料)と対比されるからである。これについてはアリストテレス『形而上学』Z巻第 10 章 (1036a9-12) と第 11 章 (1036b32-1037a5) を参照。
- 16) この点については Brüntrup (1973, 83-84) を参照。
- 17) つまり「X」という限定が付加されない生成可能のことだと考えられる。
- 18) しかしクザヌスは別の箇所で、「神はいずれでもないものにさえ先立っていて、いずれでもないものを定義する」(n.41,19-20) と述べ、「いずれでもないものはいずれでもないもの以外の何ものでもない (Est ... nihil non aliud quam nihil)」(n.41,20-21) における 'non aliud quam...' という言い回しのうちに神を見出そうともしている。
- 19) Cf. Brüntrup (1973, 85-86).